

高校と大学のまじめさの連続性

—推薦入学する学生は本当にまじめなのか？—

小 原 一 馬

The Continuity of Students' Seriousness
Between High School and University

Kazuma KOHARA

はじめに

まじめなひとが
まじめにないている
おかしい 谷川(1975)

まじめな人はなぜまじめなのだろう。

まじめな人はまじめであることによって何か直接の利益を求めるわけではない。むしろそうした直接的な利益に動かされないことで、人のまじめさは際立つこととなる。直接的な利益に向って、合理的に行動を選択しようとしている人たちから見て、まじめな人は理解しがたい。わからない。

わからないがその一方で、まじめな人を社会が必要としているように見える。社会のルールをまじめに守る人がいて、彼らによって社会は支えられているように思える。ある辞書には「よいと考えられている価値基準を知ったうえで、それにそってふるまおうとする様子を好ましいものとして評価する語」と定義されている。¹ 人をまじめさに向わせるものは、この「好ましい」という評価なのではないだろうか。こうした評価は、意識的な行為の合理的選択を超えて、人の行動を動かしているのではないか。

もっともまじめさへと人を導くのがそうした周囲からの評価なのであれば、「まじめさ」のみかけだけを演出できれば十分だろう。「まじめさ」が十分ペイするものであれば「まじめな人」として振る舞い、そのリスクが大きくなりすぎれば「まじめさ」を脱ぎ捨ててしまえばよい。これを意識的にやれば単なる偽善者だが、「よいと考えられている価値」を自分自身で信じることができれば、十分周囲からも「まじめな人」として通用し、その果実だけを拾うことができるだろう。

本稿ではこの仮説を検証するため、一流といわれる私立大学のボリューム層にあたる大学の学生に、現在と高校時代を振り返ってもらい、「まわりからまじめだと思われる」人がどのような学生生活を送っていたのか調べることにした。この大学に入学する学生のほとんどはいわゆる進学校の卒業生であり、一般入試ないし推薦の枠を勝ち取ることでこの大学に入学している。高校時代にどのような人が「まじめだと思われる」かを調べることで、間接的に、これらの学校で「よいと考えられている価値基準」を知り、高校という「社会」を支える規範を知ることができるだろう。² 大学においても同様だが、高校との違いは、高校では推薦や内申書などを通じて「まじめであること」が、高校という小社会の外でも十分に報いられるシステムとなりつつあるのに対し、大学ではまじめさの評価からえられるものはその評価それ自体に留まることにある。そのため、高校で「まわりからまじめだと思われる」人が大学でどのような学生生活を送っているかを見ることにより、「まじめさ」として評価されているものの実態がどのようなものかを示すことができるであろう。

方法

調査は2000年、関西の私立A大学において、学年末時期の出席率の比較的高いときを見はからい必修科目の受講生（一年生）を対象に質問紙を配布、即時回収という形で行われた。対象学部は偏差値は首都圏でいえば法政大、青山学院大など同ランクになる。出席者の回答率は100%で、回収数は322である。文系と理系の割合は、全体の割合を反映するようクラス数を選び、3対1とした。性別は文系で若干女子が多く、理系では男子が多い。また入学方法としては全体で7割程度が一般入試での入学、残り3割が推薦による入学となっている、文系で若干推薦入学者が多くなっている。

学部			一般入試	指定校/ 学内推薦	公募/ 自己推薦	スポーツ 推薦	合計	
文系	男性	度数	66	26	4	1	97	
		%	68.00%	26.80%	4.10%	1.00%	100.00%	
	女性	度数	94	37	6	1	138	
		%	68.10%	26.80%	4.30%	0.70%	100.00%	
	合計		度数	160	63	10	2	235
			%	68.10%	26.80%	4.20%	0.90%	100.00%
理系	男性	度数	60	15		1	76	
		%	78.90%	19.70%		1.30%	100.00%	
	女性	度数	6	2			8	
		%	75.00%	25.00%			100.00%	
	合計		度数	66	17		1	84
			%	78.60%	20.20%		1.20%	100.00%

この調査の全質問項目のうち、高校・大学における活動に直接関わる次の質問項目を本稿の分析に用いた。

表 0-2：使用した質問

Q1：あなたの高校時代の生活についてお聞きします。

A-1 あなたは高校時代、以下の活動（a：授業の予習、復習 b：クラブ活動 c：生徒会活動 d：学校行事(文化祭) e：ボランティア活動 f：受験勉強、以下Q1-3と同様）に打ち込んでいましたか。

→「高校打込」項目

（注：aを「高校打込授業」、b-eを合計して「高校打込課外」、fを「高校打込受験」とする。以下Q1-3同様）

B-1 あなたは以下の活動を、推薦入試や一般入試などといった受験との関わりにおいて、どの程度意識していましたか。

→「受験意識」項目

C 現実には以下の活動は推薦入試や一般入試などの受験の結果と関係していたと思いますか

→「受験に関係」項目

Q2：高校時代、以下の活動に打ち込んでいる人のことを、あなたは好きでしたか、嫌いでしたか？

→「打込人好き」項目

Q3：あなたの高校三年間の成績についてお尋ねします。

A：あなたの定期試験の成績は高校3年間を平均するとどのあたりでしたか？

→「高校成績平均」項目

B：あなたは高校時代、校内の定期試験の成績を特に意識していましたか

→「定期試験結果意識」項目

C：あなたは高校時代、校内の定期試験の成績は三年間でどのように推移しましたか。

→「高校成績変化」項目

D：あなたの校外での学力判定(模試など)の成績は、同じ高校の人と比べてどうでしたか？

→「模試成績」項目

F-1：あなたは高校の定期試験の結果が以下の場合（注：成績が良かった場合、悪かつ

た場合)どのように思いましたか(註:成績をもっとあげたい等)。

F-2:あなたは校外での学力判定(模試など)の結果が以下の場合、どのように思いましたか。

→F1-2「定期試験/模試—やる気」項目

Q4:高校生活は全体として充実していたと思いますか。

→「高校生活充実」項目

(↑ここまでが高校生活に関する質問)

Q5:大学でのあなたの授業の出席に関してお聞きします。

B あなたのー講義あたりの授業の欠席数は、(ー講義半期15回として)平均してどのくらいですか。登録した講義についてお答えください(30分以上の遅刻や早退は欠席とみなす)。(a:語学の授業 b:語学以外の講義)

→「大学授業出席」項目

C あなたはそれぞれ以下のような違い(授業内容に興味がある場合とない場合、教官が出席を採る場合と採らない場合)によって授業の出席率にどの程度、差がありますか。

→「出席率差」項目

Q6:いま、単位取得には最低限出席が必要な講義がふたつあるとします。あなたはどちらかの講義の単位を必ずとらなければいけません。どちらの講義をとりますか?どちらかひとつをえらんで○をつけてください

1:おもしろそうだが単位は厳しい授業

2:つまらなそうだが単位は楽な授業

→「面白い授業—楽な授業」項目

Q7:あなたは授業中、教室のどのあたりに座ることが多いですか?

A 興味ある授業

Bそれほど興味のない授業

→「興味ない授業—座る場所、座る場所の差」項目

Q8:あなたが今まで受けてきた授業の内容に関してお聞きします。

A 今まで受けてきた大学の授業の中で興味を持てた授業の割合はどのくらいですか。

→「興味ある授業の割合」項目

C 大学の授業で得られた知識や技能、考え方などはあなたの将来の仕事に役に立つと思いますか。

D 大学の授業で得られた知識や技能、考え方はあなたの将来の人生を何らかの意味で

豊かにすると思いますか。

C,D→「大学授業役立つ」項目

Q9：あなたは大学に入学後、以下の活動（注 a：語学の授業 b：語学以外の講義 d：サークル活動 e：ボランティア活動 f：アルバイト g：大学以外での習い事）にどの程度熱心に取り組んでいますか。

→「打込み講義、打込みサークル 等」項目

Q10：大学生は学生時代、どういった活動を中心的に打ち込むべきだと思いますか？ あなたの意見に最も近いものを以下の選択肢から一つだけ選んでおこたえください。

- 1 大学の授業など
- 2 大学の授業にはしぼられず、自分の興味ある学問一般について
- 3 サークル活動
- 4 サークルに限らず、個人的な趣味の活動
- 5 アルバイトなどの職業経験を積むこと

→「打込むべき」項目

(↑ここまでが大学生活に関する質問)

Q22：あなたは今の大学に入学する際、どのような過程を経ましたか？（注：推薦、一般入試など）

→「一般入試—推薦」項目

Q24：Q22で1（一般入試で入学）を選ばれた方のみお答えください。大学に入るために、推薦を受ける可能性について意識していましたか？

Q25：あなたの「まじめさ」についての意識をお聞きます。

- A 高校生時代のあなたはまじめでしたか。
- B 今現在のあなたはまじめだと思いますか。

(a：人からそのように思われていた → 選択肢：そう思う、等)

→「高校/大学まじめ 他者/自己評価」項目

分析結果1—1 高校生活の因子分析

まず高校在学時に関する質問回答に単純なパターンを見出すためにQ1～4を用い、因子分析を行った。因子数を調整し、3因子でもっとも単純でかつ解釈しやすいパターンがあら

われたためそれを採用する。回転には各因子を可能な限りはつきり特徴づけるため斜交のプロマックス回転(K=4)を用いる。なお共通性の低かったQ1B-1受験意識課外、Q1C受験に
関係課外、の項目は因子分析から削除した。

その結果が表1-1-1~3である。この3因子で説明される分散は累積で33.6%であり、回転後の負荷量平方和はそれぞれ3.3、2.9、2.7だった。

表1-1-1~3 高校生活の因子分析

表1-1-1:共通性		
	初期	因子抽出後
高校打込授業	0.608	0.515
高校打込課外	0.329	0.209
高校打込受験	0.501	0.482
受験意識授業	0.512	0.262
受験意識受験勉強	0.478	0.600
級友より授業打込み	0.604	0.630
級友より授業で受験意識	0.424	0.237
受験に関係授業	0.357	0.252
受験に関係受験	0.362	0.383
打込人好き授業	0.509	0.366
打込人好き課外	0.485	0.593
打込人好き受験	0.500	0.376
高校成績平均	0.485	0.435
定期試験結果意識	0.457	0.472
高校成績変化	0.169	0.145
模試成績	0.270	0.102
定期試験良-やる気	0.373	0.194
定期試験悪-やる気	0.461	0.363
模試良-やる気	0.346	0.135
模試悪-やる気	0.420	0.173
高校生活充実	0.227	0.142
因子抽出法: 主因子法		

表1-1-2:パターン行列			
	因子		
	1	2	3
級友より授業打込み	0.848		-0.122
定期試験結果意識	0.675		
高校成績平均	0.660	0.106	-0.135
高校打込授業	0.539	0.101	0.250
級友より授業で受験意識	0.490	-0.234	
高校成績変化	0.385		
模試成績-高校内比較	0.296		
定期試験良-やる気	0.269	0.257	
打込人好き課外	-0.118	0.806	
打込人好き受験		0.598	
打込人好き授業		0.594	
高校打込み課外		0.478	
定期試験悪-やる気	0.317	0.413	
高校生活充実		0.409	-0.124
模試悪-やる気		0.328	0.155
模試良-やる気	0.126	0.243	0.105
受験意識受験勉強	-0.108		0.825
受験に関係受験	-0.219		0.636
高校打込受験	0.141		0.616
受験に関係授業	0.122		0.425
受験意識授業	0.302	-0.166	0.375
因子抽出法: 主因子法			
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法			

表1-1-3: 因子相関行列			
因子	1	2	3
1	1	0.322	0.362
2	0.322	1	0.381
3	0.362	0.381	1

表1-1-2のパターン行列より因子1は、定期試験や高校内での成績をどれだけ気にしているか、因子2は勉強や課外活動など高校の活動一般に打込むことを良しとし、高校生活が充実しているか、因子3はどれだけ受験を意識して勉強に打込

んでいるか、をそれぞれ示していると考えられる。ここから因子1を高校競争因子、因子2を高校積極性因子、因子3を受験勉強因子と名づける。

なお、これらの因子と「高校時代のまじめさ」との間の順位相関係数（ケンドールのタウb）はそれぞれ0.375、0.225、0.199で、どれも1%有意であり、まじめさと何らかの関係があることがうかがわれる。

分析結果1-2 高校生活の性別平均因子得点

まじめさとこれらの因子の関係をさらに見ていく前に、これらの因子の因子得点と性別の関係を先に見ておこう。

表1-2-1 高校生活因子得点の性別比較

	学部	平均値	標準偏差
高校内競争因子**	男性	0.214	0.891
	女性	-0.259	0.894
高校積極性因子**	男性	0.273	0.826
	女性	-0.333	0.872
受験勉強因子**	男性	0.248	0.938
	女性	-0.294	0.746
高校まじめさ得点**	男性	1.353	0.479
	女性	1.214	0.411

*=5%有意、**=1%有意(平均の差、両側検定)

因子得点や高校まじめさ得点の値は小さければ小さいほど、その名称の傾向が強いことを意味している。高校まじめさ得点の男女差より拙稿(1999)で見たのと同様、この大学に進学するような女子は、男子よりも高校時代まじめであったと自らを振り返るものが多いことがわかる。また前節で見たようにまじめさと相関のあることのわかる高校生活の三つの因子の因子得点の平均から、女子の方がより高校内競争に意識的で、高校生活に積極的であり、受験勉強にも打込んでいたことがわかる。

分析結果1-3 高校時代のまじめさの重回帰分析

では、この三つの因子の因子得点、および性別によって、高校在学時のまじめさの意識がどれだけ説明できるかを見てみよう。³

表1-3-1~2 高校時代のまじめさの重回帰分析

R	R2乗	調整済みR2乗	推定値の標準誤差	分散分析の有意確率
0.515	0.265	0.261	0.842	0.000

	標準化係数ベータ	有意確率
高校内競争因子	0.444	0.000
高校積極性因子	0.144	0.006

重回帰には分析1-1の3因子および性別を説明変数候補としたが、因子1、2を説明変数とするモデルにおいて調整済 R^2 も最大値を示した。 R^2 は0.265でそれほど大きくないが、まじめさを仮にこれらの因子で説明するとすれば、第一に高校内競争因子が、次に高校積極性因子が重要であることが示された。1-1で見たように、受験勉強因子の因子得点も他の因子同様、単独では「高校時代まじめさ」と1%有意の相関があるが、高校内競争因子、高校積極性因子でコントロールをすると標準回帰係数0.003とほぼ消えてしまう。性別についても-0.069でありやはり統計的に有意ではない。⁴

ここから高校時代において、他からまじめだと見られていたかどうかに関しては、「クラスメイトよりも授業に打込んでいた」り、「定期試験の結果を意識したり」といった、高校内での競争にどれだけ「はまって」いたかということが第一に重要であり、第二に、学校での様々な活動に熱心に打込んだり、そうしている人を好むことが重要だ、ということがわかった。性別に関しては、1-2で女子のほうがまじめだと見られていたことがわかっているが、それはまさに彼女たちが高校内の競争を意識しがちで、また高校の様々な活動によりポジティブであったことによるものと考えられる。その二つをコントロールすると、彼女たちがとりわけまじめに見られていたとより感じているわけではない、つまり「まじめだと見られていた」のは女子のほうがそう思い込みやすいからではなく、実際の行動にその根拠があったことがわかる。

分析結果1-4 大学への一般入試入学者と推薦入学者の高校時の生活の違い

前節で、まじめさと「高校内競争」が特に強く関係していることを確認した。それを踏まえ、次にこうした「高校内競争」が実際どの程度報いられるかを確認するため、一般入試入学者と推薦入学者の違いを確認しておこう（表1-4-1：一般入試入学者と推薦入学者の因子得点比較）。⁵

	一般・推薦	平均値	標準偏差
高校内競争 因子**	一般	0.173	0.913
	推薦	-0.461	0.787
高校積極性 因子	一般	0.012	0.870
	推薦	-0.058	0.967
受験勉強因 子**	一般	-0.135	0.791
	推薦	0.315	1.063

* = 5%有意、** = 1%有意(両側検定)

高校内競争因子及び受験勉強因子の因子得点より当たり前かもしれないが、一般入試入学者のほうがより受験勉強に打ち込んでおり、推薦入学者のほうが高校クラス内競争に意識的であることがわかる。

さらに、一般入試入学者だけを対象にたずねた、推薦での大学入学の可能性の意識の程度を(Q24)これらの因子得点によって重回帰分析を行った。

表1-4-2～3：一般入試入学者における、推薦可能性の意識の重回帰分析

R	R2 乗	調整済 R2 乗	推定値の標準誤差	分散分析の有意確率
0.515	0.265	0.261	0.840	0.000

	標準化係数ベータ	有意確率
高校内競争因子	0.444	0.000
高校積極性因子	0.144	0.006

重回帰には分析1-1の3因子を説明変数候補としたが、因子1、2を説明変数とするモデルにおいて調整済R²も最大値を示した。この結果から、最終的には一般入試で入学しながら推薦入学の可能性も意識していたものは、意識していなかったものより「高校内の競争をより意識し」「高校生活に積極的で」あったことがわかる。

これらのことを反映し、一般入試入学者よりも推薦入学者のほうが、また一般入学者のなかでは推薦を全く意識しなかったものよりも少しでも意識していたもののほうが、高校時代自分はまじめだったと振り返っている（表1-4-4、1%有意）。⁶

表1-4-4：推薦入学者と、一般入試入学者で推薦可能性の意識していた人としていなかった人の高校時代まじめさ得点の比較

		平均値	標準偏差
高校時代	一般:推薦非意識	2.340	1.050
まじめさ得点	一般:推薦意識	1.900	0.810
*	推薦	1.720	0.850

* 得点が小さいほど、よりまじめと思われていたことを示す

以上の結果より、高校内での定期試験や成績をめぐる意識的な競争は「まじめさ」の評価と結びついており、それは同時に推薦での大学入学などといった外部的効果をもたらすことがわかる。これがまじめさの非目的合理的で規範的な性格と矛盾しないのは、こうした競争への参加はこれら進学校の「体制側」価値観となっており、それを疑いもせずそのままに内面化する者がいることで、その体制のリアリティが支えられているからだと考えられる。特に受験勉強という、より目的合理的で外部と結びついた活動との比較対照から、内部的な競争はそうした位置づけをされているものと推測される。その意味では拙稿(1999)の分析で見られたような受験勉強と高校の授業への打込みの意味付けの違いと同様の違いが、この調査においても見られたことになる。拙稿(1999)で分析したのは、まだこれほどまでに推薦入学枠が拡大していなかった1992年当時、しかもその多くが推薦入学枠をほとんど設けていない国公立大に進学する高校における調査結果であった。ここから、推薦入学枠の拡大により、授業に打込むことの目的合理性が高まった現在も、まじめさという意味付けは（程度の比較はできないものの）続いていることがわかる。

分析結果2-1 大学生生活の因子分析

では引き続き、Q5～10の回答を用い、高校生活と同様に、大学生生活の因子分析を行ってみよう。なおここでは、共通性の低かったQ9サークル、ボランティア、習い事への打込み、の項目は除去し、またQ10は回答の比較的多かった1と2だけをダミー変数化している。その結果が表2-1-1～3である。この3因子で説明される分散は累積で35.6%であり、回転後の負荷量平方和はそれぞれ2.8、2.5、2.4だった。

表2-1-1～3 大学生生活の因子分析

表2-1-1: 共通性		
	初期	因子抽出後
興味と出席率	0.42	0.533
出欠録と出席率	0.436	0.51
面白い授業-楽な授業	0.178	0.168
興味による座る場所の差	0.319	0.141
席位置-興味ない授業	0.427	0.295
興味ある授業割合	0.317	0.362
授業:仕事の役に立つ	0.443	0.459
授業:生活を豊かにする	0.409	0.433
打ち込み:語学	0.378	0.36
打ち込み:語学外の授業	0.548	0.521
打ち込み:ゼミ・実習	0.415	0.34
大学授業打込べき	0.23	0.101
授業以外学問打込べき	0.238	0.13
大学授業出席-語学	0.471	0.468
大学授業出席-教養	0.517	0.47
大学授業出席-ゼミ	0.401	0.409

因子抽出法: 主因子法

表2-1-3: 因子相関行列			
因子	1	2	3
1	1	-0.443	0.482
2	-0.443	1	-0.393
3	0.482	-0.393	1

	表2-1-2: パターン行列		
	因子		
	1	2	3
大学授業出席-語学	0.752		-0.186
大学授業出席-ゼミ	0.663		
打ち込み:語学	0.605		
打ち込み:ゼミ・実習	0.575	0.14	0.110
大学授業出席-教養	0.420	-0.38	
興味と出席率		0.804	0.196
出欠録と出席率	0.187	0.722	-0.140
席位置-興味ない授業		-0.52	
興味による座る場所の差		0.376	0.297
大学授業打込べき		-0.28	
授業:仕事の役に立つ		0	0.678
授業:生活を豊かにする		0	0.672
興味ある授業割合	0.180	0	0.473
面白い授業-楽な授業		0.181	0.437
授業以外学問打込べき		0.207	0.400
打ち込み:語学外の授業	0.337	-0.22	0.350

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表2-1-2のパターン行列より因子1は大学の授業にどれだけ出席し、それに打込んでいるか、因子2は自分自身の興味や出席をとるとらないなどの合理的な理由で授業に出席したり、座る場所を調節したりしているか、因子3は大学の授業をどれだけ自分の学問への動機に合うように理想化し、またその理想に合わせて授業選択などを行っているか、をそれぞれ示していると考えられる。ここから、因子1を大学授業打込み因子、因子2を大学要領の良さ因子、因子3を大学理想化因子と名づける。

なお高校生活の分析同様ここでもこれらの因子と「大学時代のまじめさ」との順位相関係数(ケンドールのタウb)を見ておくと、それぞれ0.344、-0.232、0.192でどれも1%有意であり、これらの因子もやはりまじめさと何らかの関係があることがわかる。

分析結果2-2 大学生生活の性別・学部別・入学方法別平均因子得点

さて次にこれらの因子とまじめさとの関係さをさらに見ていく前に、これら「大学授業打込み因子」「要領の良さ因子」「大学理想化因子」とそれぞれ名づけられた因子得点は、理系か文系かで大きな違いがあることに注意する必要がある。

表2-2-1 大学生生活を規定する三つの因子、および大学時代のまじめさの文系・理系比較

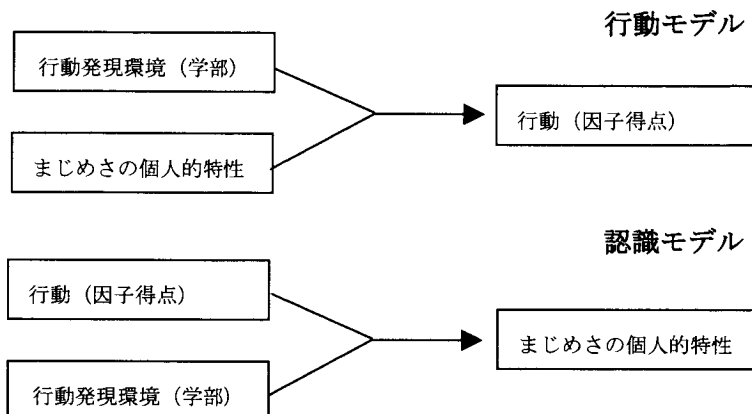
	学部	平均値	標準偏差
大学授業打込み因子**	文系	0.187	0.985
	理系	-0.524	0.475
大学要領良さ因子**	文系	-0.221	0.799
	理系	0.611	0.823
大学理想投影因子**	文系	0.173	0.846
	理系	-0.474	0.779
大学時代まじめさ得点	文系	2.450	0.890
	理系	2.320	0.680

*=5%有意、**=1%有意(平均の差、両側検定)

ここから、文系より理系のほうが、より授業に打込み、出席する授業を自分で選ばず、授業が将来役に立つと思っていることがわかる。これは一般的な常識に合致する結果だ。しかしだからといって、文系より理系の学生のほうが自分をよりまじめだと思っているわけではない。一つには自分がまじめかどうかを判断する基準とする準拠集団がそれぞれの学部内で設定されているということがあるからであろうし、また授業に出席すべきかどうかやそれが将来役立つかどうかなどは、個々の学生のまじめさや見方の問題というよりは、学部ごとにもともと決まっている、という側面も大きいのだろう。ゆえに理系の学生は、大学が提供するプログラムどおりの授業をそのまま受けているからといって当たり前前の事をしているだけで、特にそれが「要領が悪い」ということではなく、ゆえに自分がまじめだとも思わないということになるのだと考えられる。

さらに言うなら、ここで仮に「大学授業打込み因子」「大学要領の良さ得点」「大学理想化因子」と名づけられた各「因子」は、まじめさというような個人の特性をそのままあらわしているのではなく、むしろそうした特性がそれぞれの各学部という環境において、行動として発現したその具体的結果をそのまま数値化したものである、と解釈したほうがよいとも考えられる。そして人々は、一人一人の個人的特性としてのまじめさを、上記の行動モデルを逆方向にたどることによって判断しているものと考えられる（次頁の図2-2-1：大学生生活のまじめさの行動・認識モデルを参照）。

図2-2-1 まじめさの行動・認識モデル



次に性別についても見ていこう（表2-2-2 大学生活を規定する三つの因子、および大学時代のまじめさの性別比較）

	学部・性別	平均値	標準偏差
大学授業打込み因子**	文系男子	0.619	1.136
	文系女子	-0.117	0.727
大学要領良さ因子	文系男子	-0.338	0.855
	文系女子	-0.139	0.749
大学理想投影因子**	文系男子	0.478	0.859
	文系女子	-0.041	0.771
大学時代まじめさ**	文系男子	2.630	0.910
	文系女子	2.320	0.870
大学授業打込み因子	理系男子	-0.502	0.485
	理系女子	-0.735	0.320
大学要領良さ因子	理系男子	0.594	0.820
	理系女子	0.774	0.887
大学理想投影因子*	理系男子	-0.420	0.779
	理系女子	-0.996	0.594
大学時代まじめさ得点	理系男子	2.320	0.680
	理系女子	2.290	0.760

*=5%有意、**=1%有意(平均の差、両側検定)

理系の女子は極端に人数が少ない（8名）のでほとんど意味のある比較はできないため、主に文系の男女差に着目したい。すると女子のほうが男子より授業に打込み、授業が将来役に立つと思っている傾向が見られ、おそらくその結果女子のほうがより自分をまじめだと感じている。ただし要領の良さに関しては、女子のほうが良くない傾向が見られるが統計的に有意ではない。

最後に入学方法別の平均因子得点だが、大学授業打込み因子に関してのみ、「片側検定」で5%の有意な差が見られた。すなわち推薦入学者のほうが、一般試験入学者よりも授業に打込んでいる。またまじめと見られている意識もやはり推薦入学者のほうが強く、「片側検

定」で5%有意だった。⁷ ただしその違いは比較的小さく、「一応確認できなくもない」という程度の差である。

表2-2-3 大学生生活を規定する三つの因子、および大学時代のまじめさの入学方法別比較

	学部	平均値	標準偏差
大学授業打込み因子*	一般	0.056	1.001
	推薦	-0.131	0.746
大学要領良さ因子	一般	-0.011	0.919
	推薦	0.030	0.811
大学理想投影因子	一般	-0.021	0.891
	推薦	0.036	0.857
大学時代まじめさ得点*	一般	2.290	0.879
	推薦	2.462	0.826

*=5%有意(平均の差、片側検定)

このように、高校でははっきり見られた推薦入学者と一般入試入学者の差が、大学ではぼやけてしまう原因として、推薦入学者では、一般入試入学者よりも高校と大学のまじめさの意識の相関が低い、ということがひとつ考えられる。(順位相関係数ケンドールタウb 一般入試入学者0.378に対し、推薦入学者0.262)

分析結果2-3 大学時代のまじめさの重回帰分析

次に前節の結果を考慮に入れた上で、2-1で求めた因子の因子得点、および性別、学部によって、大学時代のまじめさの意識がどれだけ説明できるかを見てみよう。学部は文系が1、理系が2、性別は男子が1、女子が2としてある。

表2-3-1~2 大学時代のまじめさの重回帰分析

R	R2 乗	調整済 R2 乗	推定値の標準誤差	分散分析の有意確率
0.453	0.205	0.197	0.756	0.000

	標準化係数 ベータ	有意確率
大学授業打込み因子	0.409	0.000
学部	0.124	0.028
大学要領の良さ因子	-0.125	0.046

分析の結果、学部、大学授業打込み因子、大学要領の良さ因子を説明変数とするモデルにおいて調整済R²は最大値を示した。R²は0.205でやはりそれほど大きくはないが、まじめさを仮にこれらの因子で説明するとすれば、大学授業打込み因子、学部、大学要領の良さ因子の順番で重要であることがわかる。常識どおり、授業には打込み、要領は悪い学生のほう

がよりまじめだと見られていることがわかる。学部に関しては、授業打込みや要領の良さの程度が同じであれば、文系学部のほうが「まわりからまじめと見られている」と考えがちであるという結果であり、このこともこれまでの結果と一貫している。

投入されなかった性別、大学理想化因子はそれぞれ単独では1%有意で大学時代のまじめさの意識と相関があるが、学部、授業打込み因子、要領の良さ因子でコントロールするとそれぞれ標準回帰係数-0.006、0.023となり偏相関はほぼ消えてしまう。⁸

これらの結果から、大学でまじめだと見られるかどうかは、授業に打込んでいるか、要領が良くないかによって決まり、これらの傾向が同程度であれば、文系学部の学生のほうがよりまじめと見られやすいことがわかった。性別に関しては前節で女子のほうがまじめであると見られていることがわかっているが、これは彼女たちのほうがより授業に打込んでいるなどからの結果であり、これらの因子以外に「女子だからまじめにみられやすい」「女子だから自分がまじめと見られると思ひ込みやすい」といった要因は特になかった。これは1-2で見た高校時のまじめさと同様の結果である。

分析結果3-1 大学生生活の3因子それぞれの高校時代との連続性

では最後に、2で見た大学生生活の3因子（授業打込み因子、要領の良さ因子、大学理想化因子）と高校時代の生活とはどのように関係しているかを見ることとしよう。そのために高校生活の因子分析で算出された因子と学部、性別を説明変数として、上記の3因子のそれぞれを重回帰分析にかけることとする。

表3-1-1,2 大学生生活の3因子および大学時代のまじめさの高校時代との連続性

表3-1-1:各モデルの統計値					
被説明変数	R	R2 乗	調整済 R2 乗	推定値 の標準 誤差	分散分析 の有意確 率
大学授業打込み因子	0.569	0.324	0.315	0.772	0.000
大学要領の良さ因子	0.453	0.205	0.200	0.791	0.000
大学理想化因子	0.495	0.245	0.238	0.765	0.000
大学時代まじめさ得点	0.439	0.192	0.185	0.762	0.000

被説明変数	説明変数	標準化係数	有意確率
大学授業打込み因子	学部	-0.518	0.000
	高校内競争因子	0.264	0.000
	性別	-0.258	0.000
	高校積極性因子	0.138	0.009
大学要領の良さ因子	学部	0.457	0.000
	高校内競争因子	-0.181	0.000
大学理想化因子	学部	-0.432	0.000
	高校積極性因子	0.274	0.000
	性別	-0.195	0.001
大学時代まじめさ得点	高校時代まじめさ得点	0.420	0.000
	学部	-0.174	0.002
	性別	-0.087	0.131

ではこの結果を大学授業打込み因子から順番に見ていこう。

表3-1-1、3-1-2の一番上の行を見て欲しい。大学授業打込み因子を被説明変数としたとき、説明変数として学部、性別、高校内競争因子、高校積極性因子を選んだ場合、調整済 R^2 は最大値を示した。 R^2 は0.324である。ここから大学で授業に打込む人は、高校時代、高校内の競争を強く意識し、また学校内の活動にも積極的であったことがわかる。特に前者の要因が強く影響している。またこれらの変数に関して高校時代同じような生活を送っていた人でも、理系の学部に進めばよりいっそう大学の授業に打込み、また男子よりも女子のほうが大学の授業に打込む傾向が見られる。1-2の節で見たように、もともと女子のほうが高校内競争因子得点も高校積極性も高いのだが、それらをコントロールしてもなお、女子のほうが大学の授業に打込んでいることになる。

次に大学要領の良さ因子の重回帰分析だが、表3-1-1、3-1-2の二番目の行に見られるとおり、学部と高校内競争因子を説明変数とするモデルにおいて、調整済 R^2 は最大値を示した。このとき R^2 は0.205であり、それほど大きくはない。ここで投入した変数以外の何らかの変数の影響をより強く受けているものと考えられる。高校内の競争に打込んでいなかったもののほうが、大学に入った後で、出る授業を要領よく自己判断で選ぶ傾向が見られる。学部の差は、大学授業打込み因子と同様環境の違いで、同じ人でも理系に進めば出席する授業を自分で決められないし、文系なら自分で決められるようになる、ということの意味しているであろう。

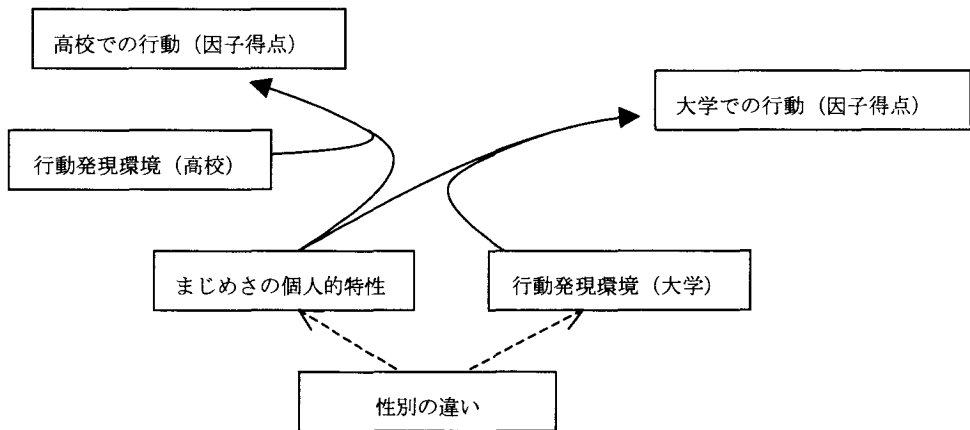
三番目に、大学理想化因子の重回帰分析だが、学部、性別、高校積極性因子を選んだ場合、調整済 R^2 は最大値を示した。 R^2 は0.245である。高校積極性因子は、大学理想化因子と意味合いも比較的似ており、高校と大学の間に連続性があるものと考えられる。また大学授業打込み因子と同様、理系学部のほうが授業が将来に役立つと考えがちであり、また女子のほ

うが高校積極性因子をコントロールしてもなお、大学理想化傾向が強い。社会状況として、女子のほうが大学の教育を将来に生かしやすかったりするとは考えづらいので、そうした実態を反映しているというよりは、彼女たち自身に大学を理想化する傾向があるものと推測される。

最後に大学時代のまじめさの意識を高校時代のまじめさ及び学部、性別とで直接重回帰を行う。するとこれら3因子をすべて投入したとき調節済 R^2 は最大値を示し、 R^2 は0.185となった。 R^2 は上記の三つの因子の重回帰と比べ小さめであるがモデルそのものは統計的に有意である。大学時代のまじめさの意識は高校時代のまじめさの意識などによってある程度は説明されることがわかる。学部に関しては、他の条件が同じであれば理系の学生のほうが多少まじめであると思われると感じている。性別の効果は統計的に有意ではないが、若干女子のほうがまじめと見られる意識を持ちやすい。

これらより、大学のまじめさに関わる三つの因子は、高校時の「高校内競争因子」「高校積極性因子」である程度説明できることがわかった。またこれらで説明できない分散の一部は学部や性別によって説明される。学部の効果に関しては、図3-1-1で示したモデルによって理解可能だ。すなわち、高校の学校生活に関わる各因子などから判断される個人の特性としてのまじめさは、それぞれの学部という環境において実際の行動を発現させ、それらの行動が大学生生活の3因子として表現される。

図3-1-1 まじめさの行動・認識モデル



一方、性別の効果に関しては二つの仮説が立てられる。第一の仮説は、社会の性別役割期待に答える形で女子大学生はもともとのまじめさといった性格とは関係なしに、より大学の授業に打込んだり、それが卒業後も役に立つと考えたりするというものである。この仮説が

成り立つ極端な例を考えれば、大学での授業内容が女子の卒業後に就くような仕事にのみ役立ち、男子の就くような仕事には役立たないようなものであるといったものになる。第二の仮説は、今回の調査での抽出された高校生活の3因子では測られないまじめさの因子が別があり、その因子が一般に男子よりも女子のほうが強く、そのため女子は大学で男子よりも一層まじめに、つまり一層授業に打込み、大学を理想化する、というものである。第二の仮説によるなら、男子が高校内競争に打込むことと女子が高校内競争に打込むことは意味が違い、前者はより合理的な、後者はより規範的な意味合いがある、という解釈もありうる。またその場合そもそもではなぜ、女子のほうがよりまじめなのか、ということに関し、生得的な違い以外に目を向けるのであれば、女子にとり「まじめさ」がより報われる可能性についても考える必要があるだろう。つまり、まじめさがどのような意味で（非意図的に）合理的な戦略であるか、ということである。⁹

この戦略という観点から二つの仮説を見直すと、仮説1では、「私はまじめである」という情報から得られる利益に男女差はなく、女子が大学でより授業に打込んだりするのは、それが女子にとって直接役立つから、ということになる。仮説2は、大学の授業に「まじめに」出席することの直接的利益とコストとは男女で変わらないが、違うのはそうしたコストを払って得られる「私はまじめである」という情報の利用可能性だ、ということになる。¹⁰ もし仮説1が棄却されれば、仮説2の重要性は一層高まるだろう。

結論と今後の課題

本稿での分析により、A大学の学生に関し、以下のことがわかった。

1 高校生のまじめさは、高校内競争因子と高校積極性因子によって説明される。受験勉強への打込みは重要ではなく、どれだけ高校内の成績等にこだわったかどうか、高校内の様々な活動に打込むことを肯定的に見ていたかどうか、まわりからまじめと見られたかに大きな影響を持つ。これは間接的に彼らの所属した進学校での中心的な規範を示していると考えられる。また高校において女子がよりまじめであるという男女差も、この二つの因子によって説明される。

2 大学に推薦で入学したものは、一般入試で入学したものより、高校内競争をより強く意識し、受験勉強には打込んでいない。その結果、高校時、よりまじめであると見られている。ここから高校でのまじめさには、推薦入学という実際の利益がともなうことがわかる。逆にいえば、こうした実際の利益の存在にも関わらず、高校内競争に打込むことは、日本における推薦入学者の増大前と変わらずに、まじめだと現在も捉えられていることがわかる。推薦入学者は大学でも若干まじめであると見られているようだが、それほどはっきりした違いではない。

3 大学生のまじめさは、大学授業打込み因子と大学要領の良さ因子によって説明される。またこれらの程度が同じであれば、文系の学生のほうがまじめであると見られやすい。これは理系学部では大学の授業に打込んだり、出席する授業を自己判断で選り好みしないことが当たり前で、そうした生活を送っていても特にまじめとはみられにくいことによると考えられる。大学でのまじめさの男女差（女子のほうがまじめ）は、高校時同様、これらの要因によって説明される。

4 3の大学時代のまじめさに関わる二つの因子は、高校内競争因子、高校積極性因子、そして入学した学部とその人の性別とで説明される。まじめさの意識そのものを見ても、高校でまじめと見られていた人は大学でも同じように感じている可能性が高い。ただし、男子は高校内競争を強く意識していたり、高校内の活動に肯定的な見方をしていたとしても、入学後は、女子ほどは大学の授業に積極的に打込んだりするわけではない。この性差に関しては、二つの解釈がありうる。一つは、大学で勉強することの直接的意義が女子にとってより大きい、ということ。もう一つは、女子にとってのみ、「まじめさ」という情報の利用価値が大学入学後も比較的高く維持される、というものである。

以上より、高校で良い成績をとるといったことは推薦入学の直接的手段となりうるにも関わらず、人々はそれを「まじめな」性格のあらわれと認め、そうした「まじめさ」は実際、大学でもある程度発揮されることがわかった。逆にいえば、そうした連続性こそが、高校内の競争に打込むものを、単に要領が良いというのではなく、「まじめである」と見る見方を支えているものとも推測される。

今後の課題としては、今回A大学で確認されたことが、この大学と同様のレベルにある他の有力私立大学でも一様に言えるのか、ということを確認するということがまず第一に挙げられよう。第二に、今回女子のほうが男子よりまじめであり、大学では高校での違い以上に性差の固有な効果が見られたわけだが、それが何故なのかも重要な課題に挙げられる。もし女子のほうが「まじめさ」という情報の利用価値が高いのだとするなら、拙稿(1999)では移動距離仮説（男子よりも女子のほうが物理的社会的移動距離が少なく、ゆえに「まじめさ」という情報の有効な範囲内に留まる可能性が高い）を提示したが、他の可能性として、職種に応じた訓練可能性の情報として利用されているという仮説も十分考えられる。今後の調査・研究の進展を期待したい。

<注>

1. 柴田、山田(2002)。
2. まじめさと規範との関係については山中(1997)、拙稿(1999)を参照。
3. まじめさをはかるのにQ25「どのように見られていたか」「実際どうだったか」の二つの設問を用意したが、「まじめさ」の共有された意味をはかる、という意味でここでは前者を用いた。また後者は前者と比較し、今回用意したような他の質問項目との相関が全体的に低めであった

- ことから、後者では「まじめさ」に関する個人的な意味付けがなされている可能性も考慮し、前者の使用がのぞましいと判断した。
4. 高校内競争因子だけでコントロールした場合、標準回帰係数はそれぞれ0.050と-0.101となる。後者（=性別）は5%有意。
 5. この推薦入学者には、分析の目的上スポーツ推薦入学者を含めていない。
 6. Q25Aa（高校時代、人からまじめだと思われていた）の回答 1 そう思う 2 どちらかといえばそう思う 3 どちらかといえばそう思わない 4 そう思わない の数字をそのまま得点化し、一般入学者と推薦入学者の平均値、一般入学者のなかの推薦を全く意識していなかった人とそれ以外の平均値をそれぞれ比較した結果。
 7. 片側検定を行ったのは、推薦入学者のほうが高校時代によりまじめで、高校内競争にも打込んでいたことがわかっているからである。
 8. 授業打込みだけでコントロールしても標準回帰係数はそれぞれ、-0.044、0.027で統計的に非有意である。
 9. 非意図的な戦略という概念はヴェブレンの「習慣」という概念やブルデューのハビトゥスという概念等によっている。詳しくは拙稿(2001b)第2章を参照。
 10. 「まじめさ」という情報の信頼性がどのように生まれるかは、スペンスのシグナル理論によっている。詳しくは拙稿(1999)、(2001a)を参照。

【参考文献】

- Bourdieu, P. 1979 *La Distinction*. Paris. Edition de Minuit (1990 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I・II』藤原書店)
- 1980 *Le Sens Pratique*. Paris. Edition de Minuit, (1988,1990 今村仁司・湊道隆訳『実践感覚 1・2』みすず書房)
- 小原一馬 1999 「真面目さという戦略——授業予復習と受験勉強に見られる性差」『研究紀要 教育・文化・社会』6, 15-30
- 2001a 「気高さの社会学-シグナル理論から見たブルデューとヴェブレン」『社会学評論』206: 18-35
- 2001b 『純粋さという戦略——ブルデュー、ヴェブレン、ゴフマンの理論を中心に』(博士論文 京都大学)
- 2001c 「高校・大学における『勉強』の社会的意味」『悠峰職業科学研究紀要』9: 73-82
- 柴田武、山田進(編)2002 『類語大辞典』講談社
- Spence, A.M. 1973 "Job Market Signaling" *Quarterly Journal of Economics* 90: 225-243
- 谷川俊太郎 1975=1995 「まじめな顔つき」『クレーの絵本』講談社
- Veblen, T. 1899 *The Theory of Leisure Class*. New York: Macmillan Company (=1961 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店)
- 山中信彦 1997 「『まじめ』の意味分析」『国語学』191: 110-98